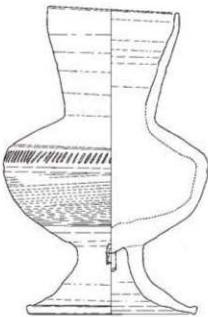


宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 54

上野遺跡3・上野1号墳

上野遺跡3・上野1号墳



2018年(平成30年)3月
四日市市教育委員会

二〇一八年三月

四日市市教育委員会

本文目次

I 調査に至る経緯と公開	1	2. 中世後期の遺構	7
1. 調査に至る経緯	1	IV 調査の成果～遺物～	17
2. 文化財保護法等にかかる諸手続き	1	1. 土器・石製品	17
3. 公開	1	2. 金属製品	18
4. 協力依頼	1	3. 金属製品の蛍光X線分析	25
II 位置と環境	1	V 調査のまとめと検討	30
1. 地理的環境	1	1. 上野1号墳の位置づけ	30
2. 歴史的環境	2	2. 中世の遺構について	30
III 調査の成果～遺構～	7	3. S E 2 0 出土の石仏について	30
1. 古墳時代後期の遺構	7		

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第12図 SK12・15・21 土層断面図	14
第2図 上野遺跡周辺地形図	3	第13図 SK10・11・12・15・21 平面図	15
第3図 上野遺跡第3次調査区位置図	3	第14図 SK14・16・17・18・19 平面・土層断面図	16
第4図 第3次調査区遺構配置図	9	第15図 遺物実測図①	20
第5図 上野1号墳平面・側面図	10	第16図 遺物実測図②	21
第6図 上野1号墳断面図	11	第17図 遺物実測図③	22
第7図 上野1号墳完掘状況平面図	11	第18図 遺物実測図④	23
第8図 上野1号墳遺物出土状況図	12	第19図 遺物実測図⑤	24
第9図 上野1号墳石室内小地区配置図	12	第20図 茶釜持手分析結果	25
第10図 調査区北壁断面図	13	第21図 菊花双鳥鏡分析結果	26
第11図 SK5平面・断面図	14		

挿表目次

第1表 遺構一覧表	9	第4表 遺物観察表②	28
第2表 金属製品一覧表	24	第5表 遺物観察表③	29
第3表 遺物観察表①	27		

写真図版

図版1 調査区全景、調査区北部全景	
図版2 上野1号墳全景	
図版3 上野1号墳玄室遺物出土状況	
図版4 調査前状況、上野1号墳完掘状況、SK14土層断面、SK15土層断面、SK17、SK19土層断面、SE20、調査後状況	
図版5 出土遺物	
図版6 出土遺物	
図版7 金属製品X線写真	

例 言

1 本書は、宅地造成にかかる上野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 調査にかかる費用は、東洋地所株式会社の負担による。

3 現地調査および整理作業は、下記の体制で行った。

・調査主体 四日市市教育委員会

　教育長 萩西 文雄

　副教育長 栗田 さち子

　教育監 吉田 隆（平成 28 年度）、上浦 健治（平成 29 年度）

　理事 中村 竹雅

・調査担当 四日市市教育委員会社会教育課

　社会教育課長 伊藤 伸樹（平成 28 年度）、川尻 秀納（平成 29 年度）

　主幹 伊藤 裕之（平成 28 年度）

　嘱託 山本 達也

　嘱託 川崎 志乃

　室内整理員 北野 節子、鈴木 美和子

4 報告書の作成業務は平成 29 年度に四日市市教育委員会社会教育課が行い、執筆・編集は山本達也、川崎志乃・伊藤裕之が行った。

5 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第 VI 座標系を基準とし、方位の表示は座標北を用いた。

6 本書に使用した遺構表示記号は、下記のとおりである。

SK：土坑 SD：溝 SX：墓

7 本書で表記する色調は、農林水産省水産技術会事務局及び財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準色色帖』（2002 年版）に準拠した。

8 発掘調査及び本書の作成に際して、下記の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。（順不同・敬称略）

津村 善博・間瀬 創（三重県総合博物館）、大川 操（三重県埋蔵文化財センター）

10 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、四日市市教育委員会が保管している。

I 調査に至る経緯と公開

1. 調査に至る経緯

上野遺跡は、四日市市大字西阿倉川字上野に所在する。遺跡内では過去に開発に伴って平成元（1989）年度に第 1 次調査、平成 2（1990）年度に第 2 次調査を実施しており、共に弥生時代から室町時代にかけての遺構・遺物が確認されている。今回行った第 3 次調査は、東洋地所株式会社の宅地造成工事に伴う事前調査として実施した。

開発計画地は、平成 27 年に埋蔵文化財の照会があり、上野遺跡の範囲内であったため、四日市市教育委員会と東洋地所との間で埋蔵文化財の保護措置が協議されることとなった。協議の結果、平成 28 年 6 月 2 日に試掘調査を行い、調査では遺構・遺物が確認された。その結果を受けて再度協議の結果、開発計画地のうち造成による切土が行われる部分について発掘調査を行うこととなり、平成 28 年 12 月 1 日より調査を行った。

2. 文化財保護法等にかかる諸手続き

文化財保護法に係る諸手続きは、以下により行っている。

【法 93 条】平成 28 年 5 月 9 日付、社会第 66 号

【法 93 条】平成 28 年 6 月 2 日付、（県教育長通知）社会第 66 号-2（事業者宛）

【試掘調査】

・協定書・協議書締結 平成 28 年 6 月 2 日（東洋地所株式会社、代表取締役 中林秀男・四日市市教育長 萩西文雄）

・調査実施 平成 28 年 6 月 20 日

・結果報告 平成 28 年 6 月 21 日付、社会第 66 号-3（事業者・県教育長宛）

【法 99 条】

II 位置と環境

1. 地理的環境

四日市市は、南北に長い三重県の北部に位置し、西は鈴鹿山脈によって限られ、東は伊勢湾に面する。市域を流れる河川は、鈴鹿山脈に源を発し、東流し

平成 28 年 12 月 1 日付け、社会第 66 号-4（県教育長宛）

【発掘調査】

・協定書・協議書締結 平成 28 年 11 月 28 日（東洋地所株式会社、代表取締役 中林秀男・四日市市教育長 萩西文雄）

・結果報告 平成 29 年 3 月 29 日付、社会第 66 号-5（事業者・県教育長宛）

・発見届 平成 29 年 4 月 3 日付、社会第 66 号-6（四日市北警察署長宛）

・埋蔵文化財認定 平成 29 年 4 月 17 日付、教委第 12-4503 号（県教育長通知）

・諒と申請 平成 29 年 10 月 13 日付、社会第 61 号-2（県教育長宛）

3. 公開

平成 29 年 1 月 14 日に現地説明会を実施した。見学者 150 名。

4. 協力依頼

金属製品の応急の保存措置を実施するために、三重県埋蔵文化財センターに支援を依頼した。

・平成 29 年 3 月 3 日付、社会第 387 号（市教育長依頼、三重県埋蔵文化財センター所長宛）

・平成 29 年 3 月 3 日付、教認第 399 号（県埋蔵文化財センター所長回答、市教育長宛）

併せて、保存措置の前後には、資料の状態を観察および記録するために三重県総合博物館に調査協力を依頼した。

・平成 29 年 3 月 1 日付、社会第 375 号（市教育長依頼、三重県総合博物館館長宛）

・平成 29 年 4 月 10 日付、社会第 14 号（市教育長依頼、三重県総合博物館館長宛）

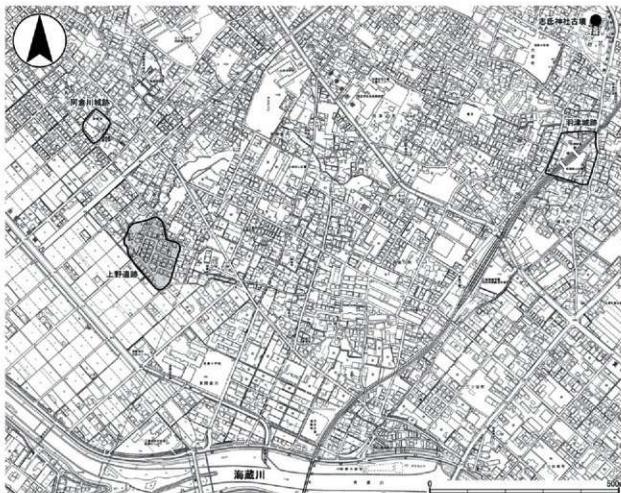
（伊藤・川崎）

て伊勢湾に注ぐ。これらの河川間に東西方向に丘陵や台地が伸び、その上には多くの遺跡が確認されている。

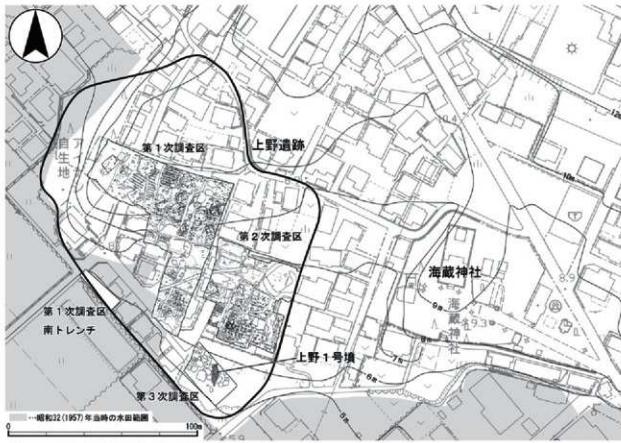
市内では、東部の海岸平野を東海道が南北に通つ



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院 1:25,000 桑名・菰野・四日市東部・四日市西部]



第2図 上野遺跡周辺地形図(1:10,000)



第3図 上野遺跡第3次調査区位置図(1:2,000)

ている。途中の日水迫分で参宮道は分岐し、伊勢神宮へ向かう。伊勢湾に面する湊からは、対岸の三河や美濃に通じ、太平洋に出て東国とも交易が行われた。鈴鹿山脈の八風越えや千種越えによって、近江を通る東山道と繋がり、京と東国を結ぶ交通の要衝となっている。

上野遺跡は、西日市市東部の阿倉川台地南辺部に立地する。

2. 歴史的環境

上野遺跡(1)とその周辺の歴史的な経過を通してい。文章中の番号は第1図の番号に対応している。

旧石器時代

四日市市周辺では、ナイフ型石器の出土する遺跡がいくつか知られている。内部川・鎌谷川流域に属する内谷戸B遺跡や宮原遺跡などの市域南部のグループと、朝明川流域の久留倍遺跡(2)及び、野呂田遺跡などを含む市域北部のグループである。上野遺跡のある阿倉川丘陵周辺では当該期の遺跡は確認されていない。

縄文時代

縄文時代草創期に属するものとしては東北山A遺跡など、有舌尖頭器が出土した遺跡が鈴鹿山麓丘陵状地の台地上で多数確認されている。早期の遺跡は、中野山遺跡(3)で繩文早期の櫛道付灰窓が多数検出されたほか、内部川流域の一色山遺跡で押型文土器が出土している。このほかに発掘調査で遺構が確認されている例を挙げると、東日野遺跡(4)や小牧南遺跡で堅穴住跡や、西ヶ広遺跡(5)で繩文中期後葉の土坑とその中から深鉢が、知志南浦遺跡(6)のような冲積地で繩文後期の突尖文土器が、伊坂遺跡(7)で狩猟用の施穴が検出されており、徐々にではあるが様相も明らかになりつつある。

弥生時代

弥生時代になると、まず前期に海蔵川と三瀧川に挟まれた生桑丘陵上に、いずれも多重環濠をもつ大谷遺跡(8)、永井遺跡(9)などの集落が営まれる。中期から後期では大谷遺跡、永井遺跡も継続して営まれるが、その他の地域でも遺跡数が飛躍的に増加し、海岸部から内陸部に広く分布するようになる。久留倍遺跡では中期から後期にかけての堅穴住

居のほか、方形周溝墓が確認され、流路からは多くの土器・木製品が出土した。特に後期になると遺構数が飛躍的に増加する。同時期、久留倍遺跡南西の丘陵上に立地する山奥遺跡(10)で大規模な集落が営まれる。土製模造鏡や多数の鉄製品などの遺物がある。このほか中野山遺跡でも集落が確認されている。菟上遺跡(11)では中期後葉に大規模な集落が形成されるが、後期になると一谷を隔てた西側の西ヶ広遺跡が中心の集落となる。一方で東側の丘陵頂部に営まれた金塚遺跡(12)では環濠を持つ高地性集落が営まれ、山村遺跡(13)でも環濠が確認されている。低地部では、辻子遺跡(14)で中期後葉から後期の集落及び水田が確認されている。墓域としては、久留倍遺跡及びこれに隣接する大矢知山遺跡(15)で方形周溝墓が検出されたほか、山川遺跡でも方形周溝墓が2基検出されている。他に菟上遺跡や広永城跡(16)、間ノ田遺跡(17)でも方形周溝墓が確認されている。この他、金塚遺跡では銘文を有する銅鐸破片が、伊坂遺跡では江戸時代に扁平鏡式袈裟搏文銅鐸が出土している。上野遺跡では中期後葉の集落跡と方形周溝墓が確認されている。

古墳時代

古墳時代前期に入ると、久留倍遺跡や上野遺跡でまとまった集落が見られるようになる。また、海岸に近い茂福城跡(52)の下層で確認された里之内遺跡(18)ではS字状口縁台付甕が出土しており、この時期に海岸低地への進出が始まったものと見られる。一方でやや内陸の横谷遺跡(36)でも小規模な集落が確認されている。周辺の前期古墳は、内行花文鏡や車輪石・勾玉などが出土した志氏神社古墳(19)があるほか、員弁川水系では桑名市の高塚山古墳が見られる程度である。菟上遺跡では滑石製合子型石製品の蓋が出土し、伊坂遺跡では勾玉や管玉が出土していることから、他にも消滅した古墳が存在した可能性がある。中期古墳としては、方墳を主体とする広古墳群(20)や、その東側にあって同じく方墳の可能性が指摘されている浄ヶ坊古墳群(21)がある。後期に入ると、遺跡数が爆発的に増加する。中野山遺跡は前期から続いて集落が営まれる。垂坂丘陵東部地域では、一旦断続していた山奥遺跡で再び集

落が営まれるようになる。海蔵川流域では、江田川遺跡(37)のほか、川向山遺跡(38)で後期の集落が確認されている。古墳は、特に7世紀以降に小規模な群集墳が多く築造される。筆ヶ崎古墳群(22)や八幡古墳(23)、御池古墳群のように横穴式石室を主体とする古墳がある一方、死人谷横穴墓群(24)や金塚横穴墓群(25)、広永横穴墓群(26)のように横穴墓も多数見られ、その導入の背景が注目される。北山C遺跡(27)では多數の方墳からなる大規模な群集墳が確認されている。このほか、所属時期は明確ではないが、鈴木敏義氏の記録によれば御池古墳群東側の丘陵上に「大塚」と称される前方後円墳が1基存在したことが伝わられる。生産遺跡としては垂坂丘陵や朝日丘陵周辺に、つまり5世紀後半に小杉大谷窑跡(29)が築かれ、その後、伊坂窑跡(30)、西ヶ谷古窑跡(31)、垂坂古窑跡(32)、拂浦古窑跡(33)など古墳時代中期から奈良時代にかけて須恵器窑が築かれた。西ヶ谷古窑跡に隣接する西ヶ谷遺跡(34)は、その生産活動に関わっていた集落と考えられる。土器師焼成坑については、山奥遺跡や西ヶ谷遺跡、落河原遺跡、久留倍遺跡で確認されている。

飛鳥～奈良時代

上野遺跡の所在する西阿倉川地区は、古代三重郡の北辺に位置している。周辺の当該期の主要遺跡は、貝野遺跡(39)、落河原遺跡などがある。特に貝野遺跡では、やや整然さを欠くが、古代の掘立柱建物が多数検出されているほか、暗文土器がまとまって出土しており、貝野遺跡を含む古代刑部郷の中心的な集落であったと考えられる。落河原遺跡では石帯が出土しており、官人の存在をうかがわせる。近隣の朝明川流域では、古代朝明郡に関わると思われる発掘調査成果も近年相次いでおり、今後の研究に大きな期待が持たれる。久留倍遺跡では東向きの正殿や八脚門等政府の施設、大規模な東西棟の掘立柱建物等が検出された。また構で方形に区画された内側に整然と並ぶ総柱建物が確認され、朝明郡の正倉院跡と推測されている。一方、西ヶ谷遺跡で確認された、奈良時代に典型的に配置された大型の掘立柱建物群は、官衙に関連する可能性が高い建物群である。谷を隔てた丘陵上に広がる菟上遺跡では、西ヶ

遺跡より古い掘立柱建物群が見つかっている。このほか、宮の西遺跡(40)は古墳のほか木簡が出土し、その内容から古代柴田郷の一部であることが知られる。石帶は、落河原遺跡や前山遺跡(41)でも出土している。対して、山村遺跡、貝野遺跡などはこの時期の一般的な集落と思われる遺跡である。中野山遺跡や筆ヶ崎遺跡(42)の周辺では、多くの建物跡が見つかり、筆ヶ崎遺跡では鉄器加工に関係する遺構や遺物が検出されていることから、当地の古代郷名である大鐘郷との関係が考えられている。

古代三重郡で確認されている古寺の寺院として

は、智積町の智積寺がある。さらには広城に目を向けると、塔心礎から唐三彩の蓋をもつ舍利容器が出土すると、朝日町の繩生庵寺(43)があり、また桑名市の鶴田魔寺(44)では飛鳥川原寺と同窓の軒丸瓦が出土している。西ヶ谷遺跡ではまとまつた瓦が出土し、伊坂遺跡では瓦窯の存在が想定されている。上野遺跡でも搬入品と見られるが、古代の布目瓦が少量出土している。

平安時代

平安前期には久留倍遺跡で引き続き正倉が建てられている。近接する大矢知山遺跡は豊富な綠釉陶器などの出土遺物から有力者の居館か寺院関連の遺跡とみられる。当時、当地域に大きな影響を及ぼしたと思われるには、10世紀前葉に建立され現在も信仰を集める垂坂山觀音寺(45)で、同寺の伝承では大膳寺跡(46)もその末寺と伝わる。大膳寺跡の発掘調査では土馬や大量的瓦が出土しているが、遺物の時期は觀音寺建立より古い。この近隣にある大谷瓦窯跡(47)は、大膳寺へ瓦を供給した瓦窯である。上野遺跡では人名と思われる「實平」と墨書がある。中世

律令的支配体制の崩壊に伴い、北勢地方の員弁郡・三重郡・朝明郡の三郡は相次いで伊勢神宮に寄進されて郡都となり、神宮の庄园である御厨・御薦・納所がたてられた。これらの庄园と関わりがあるとされる遺跡としては、官ノ西遺跡がある。これは古代から続く遺跡で、墨書き土器をはじめとする中世の遺物も豊富に出土しており、近隣の芝田遺

跡(48)・小判田遺跡(49)などとともに当地周辺の有力な集落の一部と考えられる。辻子遺跡は、多数の墨書き土器や灰釉陶器などの出土遺物から、古代末期に朝明郡が神宮に寄進された後にこの周辺に所住した弘水御厨の中心地と推定されている。久留宿遺跡では中世の遺構・遺物も多く、掘立柱建物、井戸、溝、区画溝を伴う墓葬、火葬墓等を確認した。菟上遺跡では中世前期の集落と中世後期の大火葬墓群が見つかった。上野遺跡は区画溝と掘立柱建物が確認され、貴重な中世の集落資料となっている。城館について見ると、本遺跡周辺には羽津城跡(50)、阿倉川城跡(51)があるが、後者は明確な遺構が確認できない。ほかに坂部城跡(52)がある。平野部に目を向けると茂福城跡(53)、浜田城跡(54)、赤堀城跡(55)がある。これらは地割や現存遺構から調査の復元が試みられており、赤堀城跡は現在までに5次の発掘調査が行われ、土塁などの遺構が検出されている。朝明川流域では大矢知城跡(56)、萱生城跡(57)、伊坂城跡(58)などが見られ、伊坂城跡は近年の発掘調査で防護壁の高い調査りや礎石を有する巨大な櫓門が検出され、16世紀代の当地域における城づくりの最高到達点と評価されている。

(山本)

参考文献

●四日市市史 第一巻 史料編「自然」1999

『四日市市史 第二巻 史料編「考古」1』1988

『四日市市史 第三巻 史料編「考古」2』1993

『四日市市史 第七巻 史料編「古代・中世」1991』

●四日市市教育委員会

『大谷道路発掘調査報告書－A地区、B地区－』1966

『大谷道路発掘調査報告書Ⅱ－C地区の遺構－』1976

『大谷道路発掘調査報告書Ⅲ－C地区の遺物－』1977

『北山遺跡発掘調査報告書』1977

『西ヶ谷遺跡発掘調査報告書－D地区－』1972

『西ヶ谷道路発掘調査報告書』1973

『西ヶ谷の坂上古墳』1973

『大膳寺跡』1978・1979・1980・1981・1982

『西ヶ谷道路3・4号線、西ヶ谷道路4・5号線、西ヶ谷道路5』2002

『大矢知山遺跡』2002

『山東道路1』2003、『山東道路2』2004

『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』2006

『久留宿遺跡』2013

『川原宿遺跡』2015

『江口川遺跡』2016

『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書－XII』2017

『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書－XIII』2018

●四日市市教育委員会

『上の道跡1』1991、『上の道跡2』1992

●朝日町教育委員会

『岡生地区道路埋蔵文化財調査報告書』1988

●朝日町

『みえささひ文化財マップ』1999

●三重県文化財連盟

『東名阪道埋蔵文化財調査報告書』1970

●三重県埋蔵文化財センター

『金坂遺跡・金坂横穴墓群・山村道路発掘調査報告書』2002

『研究紀要』第13号 2003

『伊坂城跡発掘調査報告書』2003

『伊坂城跡発掘調査報告書』2004

『山村道路(第1次)発掘調査報告書』2004

『辻子遺跡発掘調査報告書』2004

『岡ノ田遺跡・辻子遺跡(第4次)発掘調査報告書』2005

『美之郷跡発掘調査報告書』2005

『広永水内村墓群・広永1号墳・広永道路発掘調査報告書』2006

『西ヶ谷遺跡(第3・4次)発掘調査報告書』2006

『志知南浦跡発掘調査報告書』2008

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～龜山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II』2012

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～龜山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III』2013

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～龜山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV』2015

『新名神高速道路林設事業に伴う神戸線(四日市JCT～龜山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II』2012

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～龜山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III』2013

『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～龜山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV』2014

『中野山道路(第2・3・6・7次)発掘調査報告書』2016

III 調査の成果～遺構～

1. 古墳時代後期の遺構

上野1号墳 (第5～9回)

調査区中央やや北よりの位置で検出した横穴式石室を有する古墳であるが、調査前に埴土は全く現存しておらず、事前にその存在は把握していなかったものである。平成元年の第1次調査より前には、台地上に高まりが見られたとする情報や、調査区周辺の地形などから、付近にはもに埴土が滅失した古墳の存在が想定されるため、それらを含めて一連の古墳群ととらえ、「上野古墳群1号墳」と命名した(以下、「上野1号墳」とする)。

遺構は、横穴式石室とその墓坑、それに続く墓道と石材抜き取り穴がある。石室は中央軸を N4°E とし、南に開口する。側壁石材のうち、原位置をとどめているのは玄室東壁1段目の5個のみである。

玄室南端付近で検出された大型石材は、抜き取り穴中にあたることから、この位置に元々あったものではなく、本来は立石柱と渡道付近の天井石であったと考えられる。掘り出したものの、何らかの事情で搬出されずに放置されたのである。羨道入り口東壁付近に小型の石材1個が残存しており、実測も行ったが床面から浮いた状態であったため原位置のものではないと考えられる。

石室使用石材は全て砂岩であり、上記石材のほかに盗掘時に破壊された石材の一部と見られる同質の砂岩片も古墳周辺から多数出土した。

石室の掘方は幅 3.6m 以上、長さは 8.5m 以上と推定される。

玄室は、西側の抜き取り穴の状況と残存する東壁及び縁敷の範囲などから考えて、全長 4.2m 程度、中央部幅が 1.8m 程度で緩やかな胴張り形となり、西側に袖を持つ丸袖式であると見られる。床面には厚さ 3～15cm 程度の堅く締まった縁敷があり、石室中央部ではさらさらの土に拳程度の敷石が約 1 m の広さで認められた。敷石の西端付近には、約 15cm 四方で厚さ 5cm 程度の板状石材1個があり、棺台の可能性がある。出土遺物のうち、ある程度原型をとどめた須恵器は敷石の上面に相当するレベル

で検出されたが、多くは盃型により原位置から移動している可能性が高い。

羨道部は、幅が不明であるが掘方の形状などから、長さは 2.2～2.5m 程度であろう。羨道の南側には素掘りの墓道が接続する。この墓道南端から玄室部掘方北端までの長さは 11.5m である。

古墳に伴う出土遺物は、土師器、須恵器、鉄製品、玉類があり、混入遺物として弥生土器、陶器がある。

2. 中世後期の遺構

土坑

SK2 (第4回) 調査区北部で検出した土坑である。長径 1.7m 以上、短径 0.8m の楕円形と見られる。東半は削平されている。底面はほぼ平坦で、深さは 0.1m 程度である。主な遺物として土師器、陶器がある。

SK4 (第4回) 調査区北部で検出した土坑である。東西 4.8m 以上、南北規格 0.8m の略方形と見られる。東半は削平されている。底面は北東に向かって下がっており、深さは 0.2m 程度である。東端に SE20 が複数あるが、前後関係は不明である。主な遺物として土師器、陶器がある。

SK5 (第11回) 調査区北部中央付近の南方に傾斜する緩斜面で検出した土坑である。東西 4.2m、南北 3.4m の略方形である。底面はほぼ平坦で、深さは 0.4m 程度である。主な遺物として土師器、陶器、砥石があるほか、須恵器の混入も見られる。銅製吊手茶釜 (66) は、中央付近で出土した。この付近では他に十数センチ角程度の砂岩石材も多数出土した。いずれも破片で全体形状は不明ながら、研磨痕やノミによる加工痕が見られることから、石造物もしくは大型砾石の一部である可能性がある。

SK6・7 (第4・10回) 調査区中央東壁際で検出した土坑である。東西 2.4m 以上、南北 4.2m の楕円形である。掘削開始時点では東西に 2つ土坑が並んでいるものと考えていたが、断面観察により同一土坑であると判断した。土層断面から、本来は側壁が著

しくオーバーハングし、袋状の断面形態をなしたことが分かる。底面はほぼ平坦で、深さは0.9m程度である。主な遺物として土師器、陶器がある。

SK10（第13図） 調査区中央部付近で検出した土坑である。東西2.4m、南北2.3mの方形である。底面は平らで深さは1.0mである。出土遺物は土師器がある。

SK11（第13図） 調査区中央部付近で検出した土坑である。東西4.0m、南北2.1mの不整形である。

底面はやや凹凸があり、最深部で深さは0.4m程度である。主な遺物として土師器、須恵器、陶器がある。

SK12（第12・13図） 調査区中央部付近で検出した土坑である。東西1.1m、南北1.9mの不整形である。底面は平坦で深さは0.3mである。遺物はごく少量の土師器が出土している。

SK14（第14図） 調査区南部で検出した土坑である。東西長軸4.3m、南北幅2.2m、深さ0.7mで、長方形土坑の短辺に切りとと思われる突出部が付く平面プランである。底面は平坦で、側壁は垂直ないしき若干オーバーハングする。遺物は、土師器、須恵器、陶器、土製丸玉がある。後述するSK17とSK19も位置が近接して構築された類似の形態をもつ構造であるが、性格は不明である。

SK15（第12・13図） 調査区中央部付近で検出した土坑である。東西2.9m、南北2.8mの略円形である。底面は平坦で深さは0.6mである。遺物は、土師器、須恵器、陶器が出土している。

SK16（第10・14図） 調査区南部で検出した土坑である。東西2.1m以上、南北2.0mである。東側は調査区外へと延びている。底面は平坦で深さは0.7mである。遺物は、土師器、陶器が出土している。

SK17（第14図） 調査区南部で検出した土坑である。東西3.1m以上、南北2.6mの方形である。底面は平坦で深さは0.8mである。遺物は、土師器、須恵器、陶器、土器、焼土塊が出土している。

SK18（第14図） 調査区南部のSK16とSK17の間で検出した土坑である。東西2.5m、南北1.4mの不整形である。底面は平坦で深さは1.0mである。出土遺物はない。

SK19（第14図） 調査区南部のSK14とSK17の間

で検出した土坑である。東西2.4m、南北2.3mの方形である。底面は平らで深さは1.0mである。出土遺物は土師器がある。

SK21（第12・13図） 調査区中央部西寄りで検出した略方形土坑である。東西4.9m、南北5.4mである。底面はやや凹凸があり、深さは0.7mである。土層断面から、複数の土坑が重複しているものと考えられる。出土遺物は土師器がある。

溝

SD9（第4図） 上野1号墳の玄室南端付近を東西に横切る溝である。幅0.6m、長さ2.7mで、古墳の掘削に伴って消滅した。出土遺物は土師器がある。

SD13（第14図） 調査区南部のSK16、SK18、SK17の上に重複する溝である。幅1.8～0.7m、長さ5.2m以上、深さ0.3mで、S字状に蛇行している。出土遺物は土師器、土縫、和鏡（310）がある。和鏡は12世紀末から13世紀初頭のもので、構造の時期は土師器から中世後期以降と考えられることから、この溝に本来伴う遺物ではない。

井戸

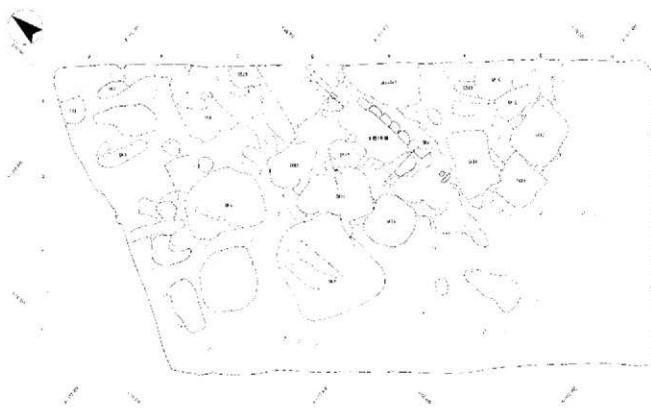
SE20（第4・10図） 調査区北部壁際で検出した井戸である。南北1.6m、東西1.1m以上、深さ2.8mの素掘り円形井戸で、底部径は0.9mである。底部からは若干の植物片が出土したが、曲物などは設置されていなかった。最下層には少量の礫が見られ、これに多くの遺物が含まれていた。出土遺物は土師器、須恵器、陶器、石仏のほか、何らかの石造物の一部と見られる加工痕を有する砂岩や花崗岩の石材がある。出土遺物から、埋没年代は16世紀後半と推定される。

（山本）

【註】

① 四日市遺跡調査会『上野遺跡』1991 3頁

- ② 三重県総合博物館の津村善博によると、上野1号墳周辺において砂岩は古墳南側を流れる海蔵川の上流域でも産出するが、本古墳の石室に使用された黒い泥岩粒を多く含むものは、当地域では員弁川上流域で産出する1億5千万年ほど前のものであることから、員弁川流域からの搬入品と考えられるとの所見であつた。



第4図 第3次調査区造構配置図 (1:200)

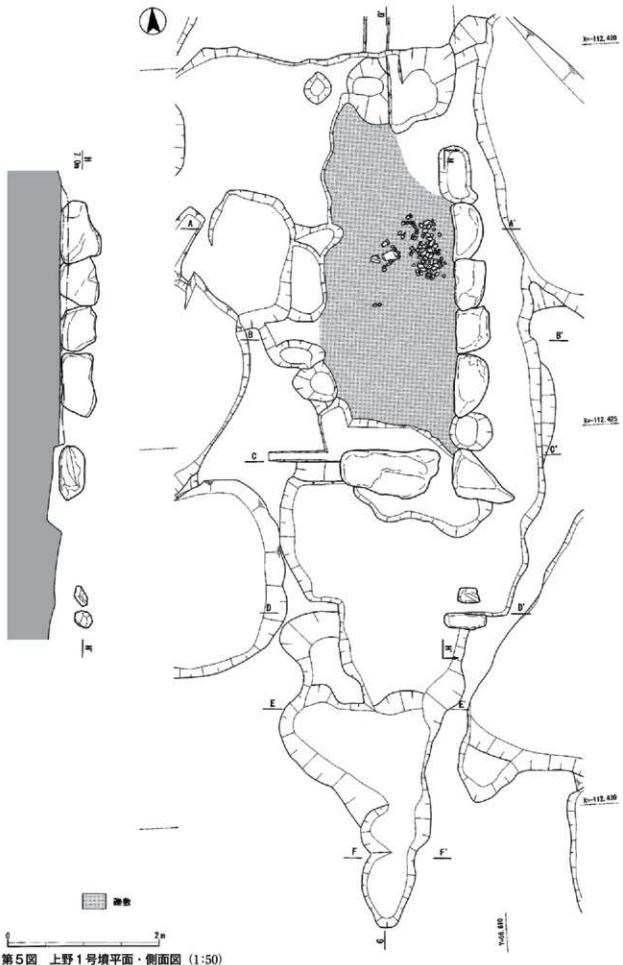
第1表 構造一覧表

番号	構造名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SK1	近世土塁	近世	A-1	1.3以上	1.4	0.2	土師器、陶器	
SK2	中世後期	A-1		1.7以上	0.8	0.1	土師器、陶器	東半削平
SK3	近世土塁	A-3B-3		2.8	1.4	0.1	陶器	
SK4	中世後期	B-4C-4		4.6以上	0.5以上	0.2	土師器、須恵器、陶器	東半削平
SK5	中世後期	B-3C-2.3		4.2	2.1	0.4	土師器、須恵器、陶器、鐵石、不明石材	西半削平含土
SK6	中世後期	E-4		7.4以上	4.2	0.9	土師器	SK17・18の土坑
SK7	中世後期	E-4		2.4以上	4.2	0.9	土師器、陶器	SK8と一体の土坑
SK10	中世後期	C-3D-3		2.9	2.1	0.4	土師器、陶器	
SK11	中世後期	D-3E-3		4.0	2.9	0.4	土師器、須恵器、陶器	
SK12	中世後期	D-3E-2		1.9	1.1	0.3	土師器	
SK14	中世後期	F-3		4.3	2.2	0.7	土師器、須恵器、陶器、土製丸玉、土鏡	西方土坑右口付近
SK15	中世後期	E-2.3		2.8	2.8	0.6	土師器、須恵器、陶器	内部土坑
SK16	中世後期	F-4.0-4		2.1以上	2.0	0.7	土師器	
SK17	中世後期	G-4		3.1	0.9	0.6	土師器、須恵器、陶器、燒土塊	西方土坑
SK18	中世後期	F-4.0-4		2.5	1.4	1.0	土師器	
SK19	中世後期	G-3		2.4	2.3	1.0	土師器	方型土坑
SK21	中世後期	D-1E-1.2		5.4	4.9	0.7	土師器	方型土坑

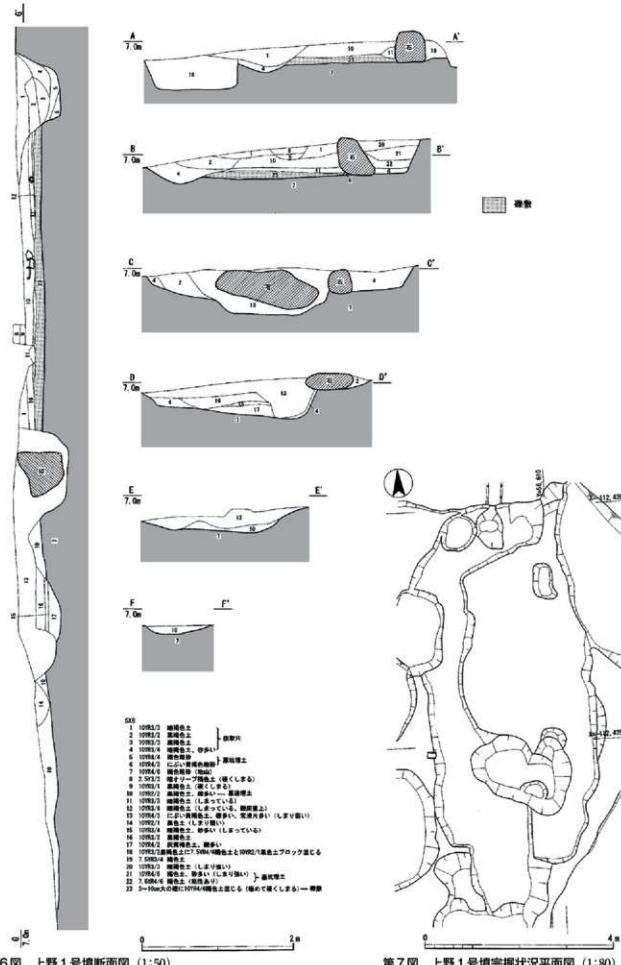
番号	構造名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SD9	中世後期	E-3F-2		2.7	0.6	—	—	上野1号墳より新
SD13	中世後期	F-4.0-4		5.2以上	1.8-0.7	0.3	土師器、土縫、和鏡	SK16、SK17より新

番号	構造名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
SE20	中世後期	C-4		1.1以上	1.6	2.8	土師器、須恵器、陶器、石仏、不明石材	表面付井戸

番号	構造名	時期	グリッド	長(m)	幅(m)	深さ(m)	遺物	備考
上野1号墳	古墳後山路	D-3AE-3.4F-2.3		1.15	3.6以上	0.5	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、瓦、鉄器、玉類	横穴式石室すずき井筒持番号SKX

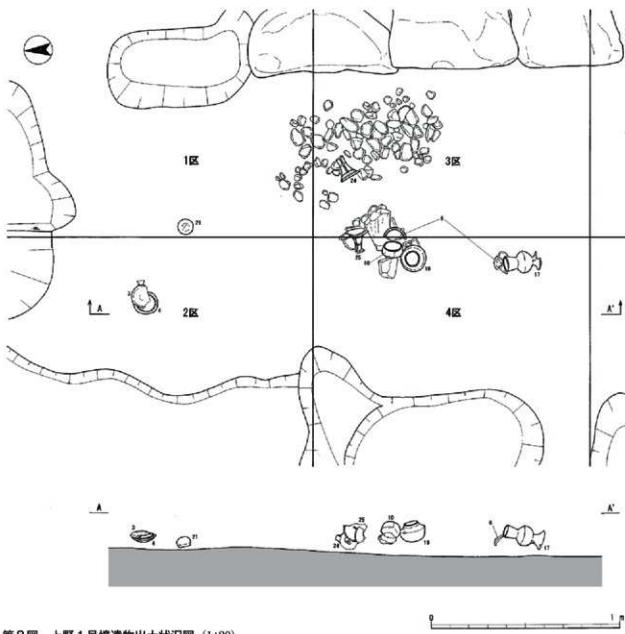


第5図 上野1号墳平面・側面図 (1:50)

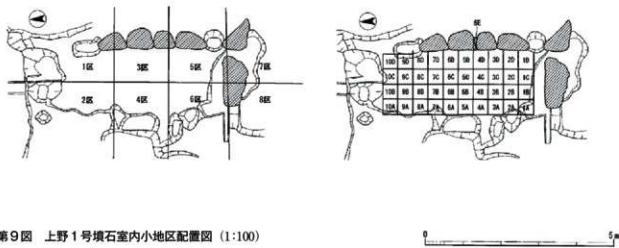


第6図 上野1号墳断面図 (1:50)

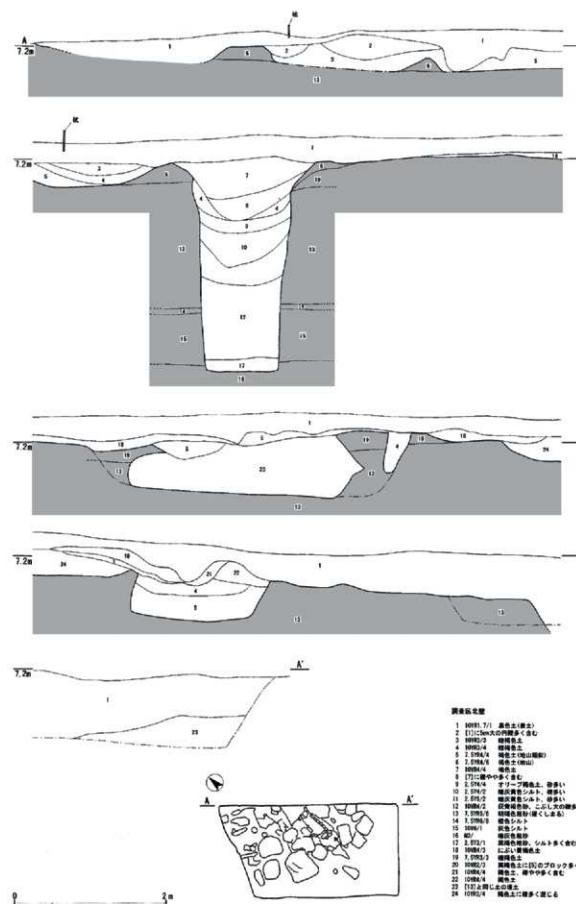
第7図 上野1号墳内構造平面図 (1:80)



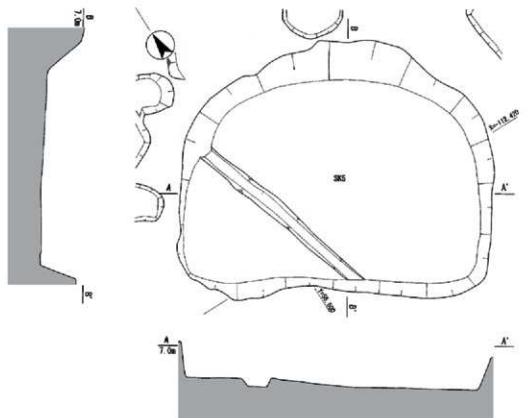
第8図 上野1号墳遺物出土状況図 (1:20)



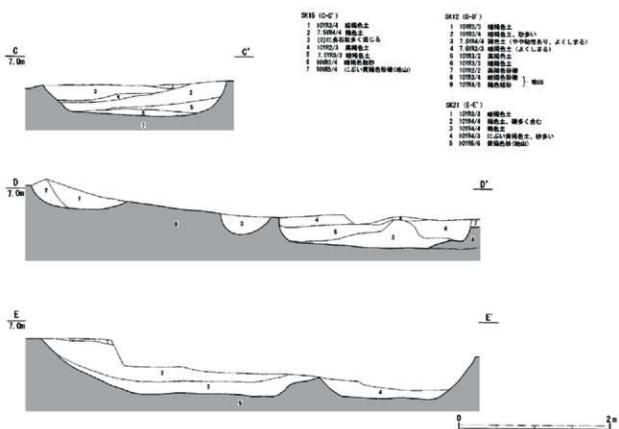
第9図 上野1号墳室内小地区配図 (1:100)



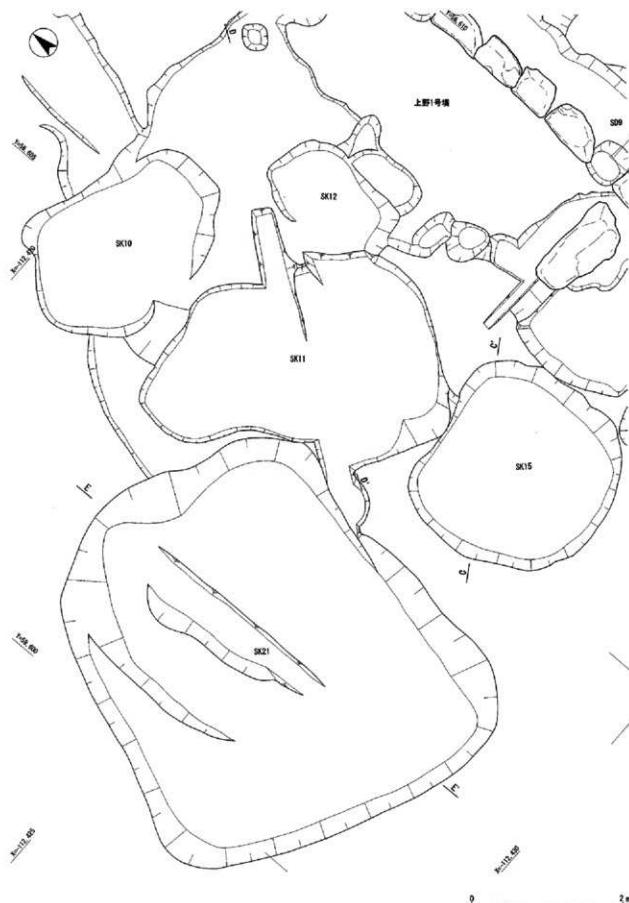
第10図 調査区北壁断面図 (1:50)



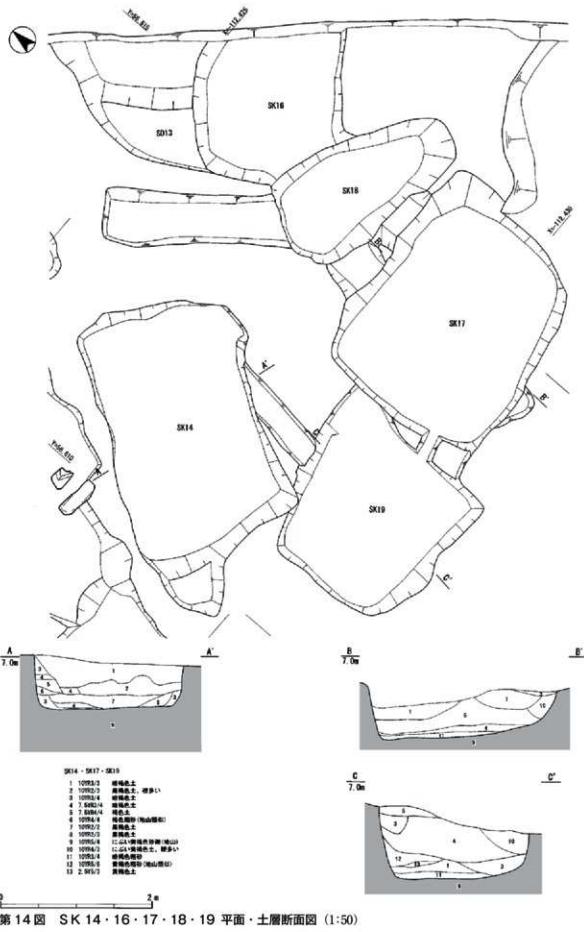
第11図 SK 5 平面・断面図 (1:50)



第12図 SK 12・15・21 土層断面図 (1:50)



第13図 SK 10・11・12・15・21 平面図 (1:50)



IV 調査の成果～出土遺物～

1 土器・石製品(第15～18図)

上野1号墳出土遺物(1～56)

上野1号墳の遺物は、古墳本来の副葬品と考えられるもの(1～48)と、石室の盗掘や石材の抜き取りの際に入り込んだと考えられるもの(49～56)がある。

1～3は須恵器杯蓋、4～7は須恵器杯身で、いずれも7世紀前半のものである。これらのうち、3の杯蓋と4の杯身は組み合わされた状態で石室の中央や奥寄りの床面で出土し、概ね原位置を保っていると考えられる。このため、内部の土も精査したが、微細遺物等は検出されなかった。また、砂粒が多く含む胎土や施成のさく、形態的な特徴は、本古墳の北西約2.8kmに位置する西ヶ谷窯の製品に類似するものであり、同窯跡の可能性がある。

8～10は須恵器盤で、いずれも7世紀前半のものである。8は体部中央に波状文を施すもので、脚が付く可能性がある。9は体部下半にカキメを施す。10は完形で、底面はヘラケズで仕上げる。10は石室中央部床面で概ね原位置に近いと考えられる状態で出土したが、8と9は玄室を中心に各所に破片が散らばっていた。

11～14は須恵器提瓶である。いずれも7世紀前半のものである。14は横瓶の可能性もある。

15・16は須恵器壺蓋である。15は6世紀後半のもので、玄室奥部で出土した。16は7世紀前半のものである。

17は須恵器台付蓋である。蓋の体部中央に刺突文を施し、下半はカキメを施す。底部は厚く、内面を工具で押さえて仕上げている。脚部には2方向に長方形のスカシを入れる。石室中央部床面で口を入口方向に向けて倒れた状態で出土した。18は須恵器台付蓋脚部である。いずれも7世紀前半のものである。

19～22は須恵器短頸壺である。19は底部が厚く、内面には所々褐色の付着物が見られる。石室中央部床面で出土した。20は体部にカキメを施す。床面ではないが石室奥部及びSK6などから破片が出土した。21は内底面を工具によるオサエ、外底面は不

定方向のケズリを施す。石室奥部の床面に伏せた状態で出土した。22は石室内各所で破片が出土した。20が6世紀末ないし7世紀初頭と見られるほかは、7世紀前半のものである。

23は須恵器有蓋高杯の蓋で、石室奥部で出土した。6世紀後半のものである。

24～27は須恵器高杯で、いずれも7世紀前半のものである。24は脚部で2段2方向のスカシがある。石室中央部床面で出土した。25は無蓋高杯で、脚部に2段2方向のスカシがある。24と共に石室中央部床面で出土したが、接合する破片は玄室南半部やSK5などからも出土した。26は脚部で、3方向にスカシがある。墓道内からの出土である。27は脚端部で、24・25とともに出土した。

28は土師器長胴甕で、石室中央部で出土した。外面上に少量ススが付着している。

29・30は青色のガラス玉、31～48は滑石製臼玉である。全て石室中央部の床面付近の土砂を水洗して検出した。

49～52は山茶碗。49～51は尾張型3型式、52は湯美型4型式。

53は常滑焼の広口壺で中野晴久氏の編年による第11型式のものである。54は常滑焼の甕で中野8型式のものである。55は土師器縁である。

56は瓦。にぶい橙色で、外面に斜格子のタタキが施しており、奈良時代頃のものと見られる。同様の瓦は第1次調査で4点報告されており、このうち格子タタキを有するものは1点ある。古代瓦は他にも第2次調査で出土している。

中世の遺構出土遺物

SK4 (57)

57は常滑焼の片口鉢で、中野晴久氏の編年による11～12型式のものである。

SK5 (58～60)

58は漬戸美濃産陶器の擂鉢で、大窓3段階後期のものである。59・60は漬戸美濃産陶器の天目茶碗で、59は大窓2段階のもの、60は古漬戸後IV期新段階

のものである。61は古瀬戸後IV期古段階の平碗である。62は見込みに印花文のある陶器丸皿で、大窓2段階頃のものであろう。63は常滑焼の広口壺で中野編年12型式のものである。64～65は土師器羽釜。66は土師器茶釜の吊手部で、吊り下げ穴には銅製の吊金具の一部が残っている。吊金具は、厚さ0.3mm程度の銅板を丸めて管状としたものを環形にしている。67は土師器皿である。68は員弁方面で産する頁岩製の砥石である。

SK7 (69)

土師器皿である。

SK10 (70～77)

70は灰釉陶器の深碗で、折戸53号窯型式のものである。71は常滑焼の片口鉢で中野11～12型式のものである。72は常滑焼の甕で中野6a型式のもの、73は常滑焼の広口壺で中野10型式のものである。74～76は土師器羽釜、77は土師器茶釜である。

SK11(78～83)

78は陶器鉢で、古瀬戸後I期のもの。79・80は常滑焼の広口壺である。79が中野10型式で、破片の一部はSK10出土のものと接合した。80は中野8b型式のもので、肩部にスタンプ文がある。81は常滑焼の甕、中野9型式で、破片の一部はSK10出土のものと接合した。82は土師器皿である。83は陶器四耳壺で、古瀬戸前III期のものか。

SD13 (84～85)

84は瀬戸美濃産陶器の擂鉢II類で鉛釉がかけられている、大蓋3ないし4期のもの。85は土師質の土壺である。

SK14 (86～92)

86は尾張型3型式の山茶碗で、内面は使用により摩耗している。87は山皿。底面中央に穴があいているが、意図的な穿孔かは不明。88は古瀬戸の折縁深皿で後III期頃のもの。89は常滑焼の広口壺で中野7型式。90は常滑焼の甕で中野10型式である。91は土師器皿である。92は土製丸玉である。

SK15 (93)

古瀬戸の片口鉢II類で中IV期のものである。

SK17 (94～97)

94は灰釉陶器碗で百代寺窯型式のものである。95・96は土師器皿である。97は南伊勢系の土師器鍋である。

SK19 (98・99)

98は山茶碗で、尾張型10型式。使用により若干摩耗している。99は瀬戸美濃産陶器の天目茶碗で、古瀬戸後I期のもの。

SE20 (100～110)

100は山茶碗で、尾張型5型式。101は瀬戸美濃産陶器の天目茶碗で鉄釉がかかる。大窓2期のもの。102は常滑焼の片口鉢で、中野11～12型式のものである。SE20下層出土の破片とSK4・SK5・SK10出土の破片が接合した。103は古瀬戸の花瓶1型。104・105は常滑焼の甕で、104は中野9型式、105は中野10型式のもの。106は常滑焼の広口壺で下層から出土した。外面上に厚く自然釉がかかつており、中野12型式のもの。107は土師器皿で、灯明皿として使用された可能性がある。108・109は土師器羽釜である。110は織粒の砂岩で作られた石仏で、下層から複数とともに3つに割れた状態で出土した。梢円形の自然石の下半を整形して自立するようにし、前面に仏の座像を陽刻する。首から上の破片は現存しないが、前面から首の破断面にかけて煤が付着していることから、埋没時点で欠損していたようである。

SK21 (111)

土師器羽釜である。

包含層 (112～120)

112・114は常滑焼の甕で中野10型式のもの。113は常滑焼の広口壺で中野7型式のもの。115は常滑製品の陶鑊。116は古瀬戸の折縁中皿で、後II期のもの。117は須恵器の鉢と思われる。118は円形加工陶片で、にぶい赤褐色の鉄釉がかかつており、恐らく近世以降のものである。119は凝灰岩製の砥石、120は砂岩製の砥石である。

(山本)

【註】

① 須恵器については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店

1980を参考にした。

② 山茶碗の発掘については藤澤良祐「山茶碗研究の現状

と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994を参考にした。

③ 常滑製品は中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真橋社 1995を参考にした。

④ 潤戸美濃産製品は、瀬戸市埋蔵文化財センター『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～ 資料集』1996、瀬戸市埋蔵文化財センター『戦国・繩文期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品 一東アジア的視野から～ 資料集』2001 を参考にした。

⑤ 石材の鑑定は、三重県総合博物館 津村善博氏のご教示による。

2. 金属製品（第21図）

上野1号墳 (301～308)

鹿角装刀子（301）は、刀身部分の残存長が16.4cmで、刀先が欠損する。柄部分は刀身が木質で被われ、更に上面に鹿角が薄く残っている。また刀身部分にも、一部で鹿角が残る。刀子切先片（302）、刀子身刀片（303）、刀子茎（304）はいずれも細片である。304には、柄部分に鹿角が薄く残存する。

305～308は鉄鏡である。305は鎌首部の断面形が片丸造の長頭鏡であり、茎部には樹皮による櫻巻がわずかに残存する。306は角闘の闇面を境として、茎部に樹皮が残存する。307は鎌首部の断面形が平行片造の鐵鏡である。308は鉄鎌頭部片である。

SK21(309) 板状鉄製品は、幅3.7cmで、両端は欠損している。板状の鉄地を半分に折り曲げて整形されている。

SD13(310)

菊花双鳥鏡（310）は、鏡面径8.3cm、縁厚0.5cm、鏡厚0.1cm、紐径0.5cmである。紐座は花茎座紐であり、紐の痕跡が薄く貼りついている。材質は、Cu（銅）46.25%、Sn（スズ）23.08%、Pb（鉛）21.38%、As（砒素）8.12%等である（第21回参照）。

鏡背面には、円形の鏡面の外縁にそって、右下から左上方に向かって菊花を配置し、左上方の空間に双鳥を配置する。このような文様構成は、12世紀以降にみられる定型模様とされており、鎌倉時代になると、双鳥は紐座の左下寄りに位置を得るとされている。^① 鏡背面の文様構成からは、本資料は12世

紀以降の所産であり、なおかつ鎌倉時代に定型化する以前の資料と判断できる。

また、縁厚が0.5cmである点で、縁厚を分類した久保分類では厚縁鏡（Ⅲ類）に相当する。厚縁鏡（Ⅲ類）は12世紀後半から見られ、第4四半期から鎌倉時代にかけて一般的になるとされている。^②

材質の点では、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての鏡は、銅・錫・鉛・ヒ素および銅・鉛・ヒ素を主成分とする鏡の割合が多いことが指摘されている。^③

鏡背文様、形態、材質の点からみて、12世紀末から13世紀初頭にかけての平安時代末期から鎌倉時代前期の鏡と捉えられる。

なお、透過X線画像の観察からは、鏡の破断面から鳥文付近にかけて、肉眼では観察できない亀裂が数多く観察される点や、鉢の上方の崩廻部分において鏡頭が薄くなっている点が観察される。

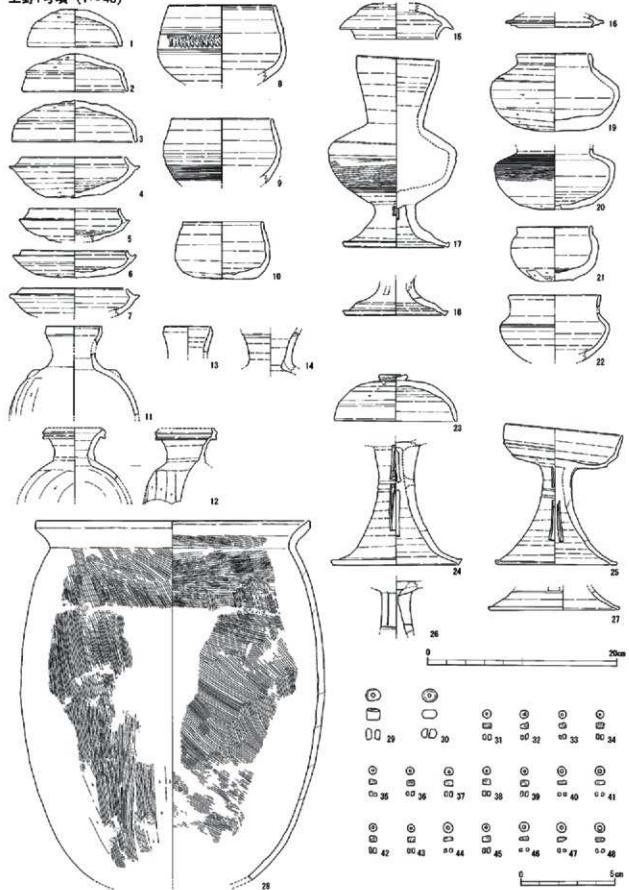
（川崎）

【註】

① 久保智賀『日本の美術』No.394 中世・近世の鏡・至文堂 1999

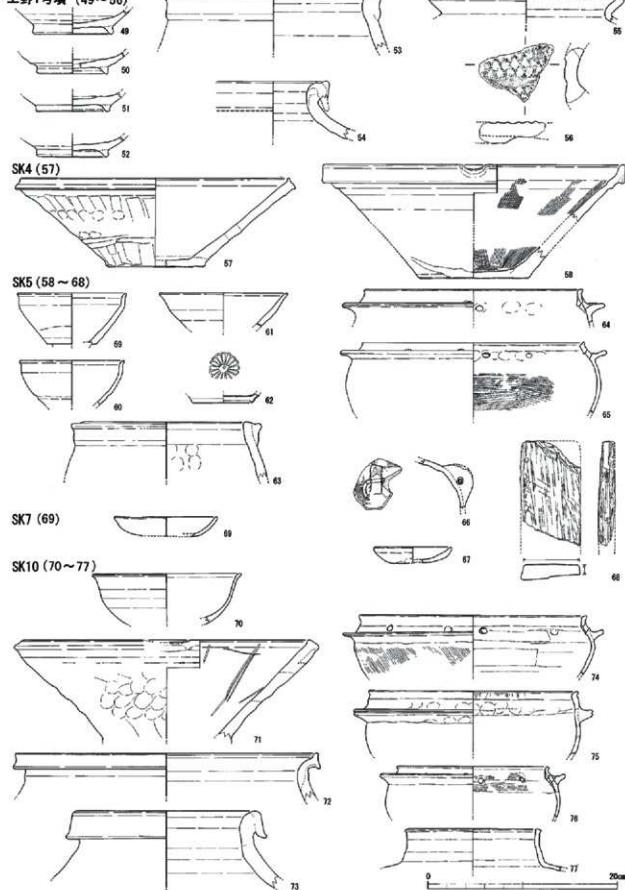
② 中川あや編『日光二荒山神社中宮神宝館所蔵木山頂遺跡出土鏡の研究』東アジア金属工芸史の研究 17 飛鳥資料館研究会録第17冊 独立行政法人国際文化財機構奈良文化財研究所 日光二荒山神社 2014

上野1号墳 (1~48)

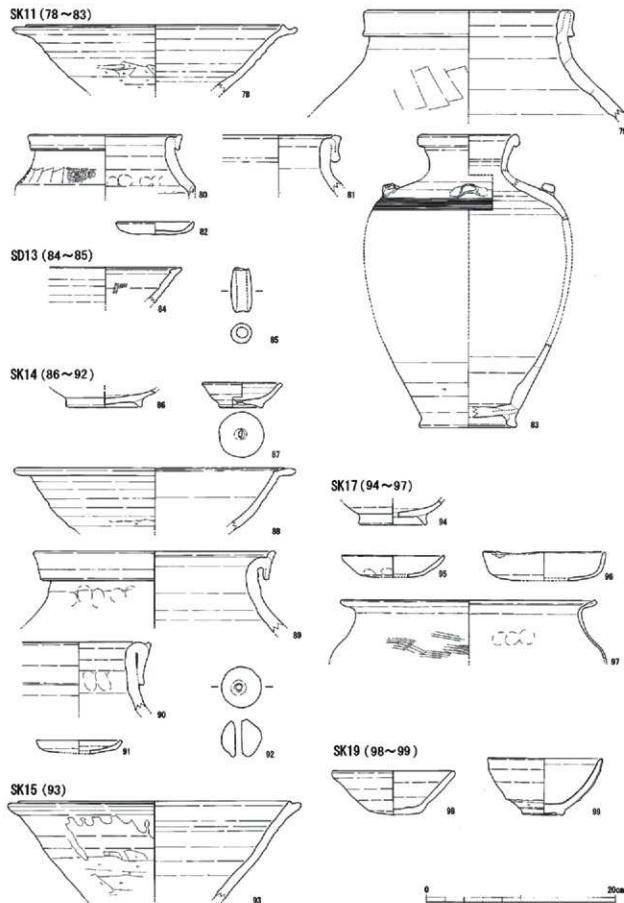


第15図 遺物実測図① (1:4)(1:2)

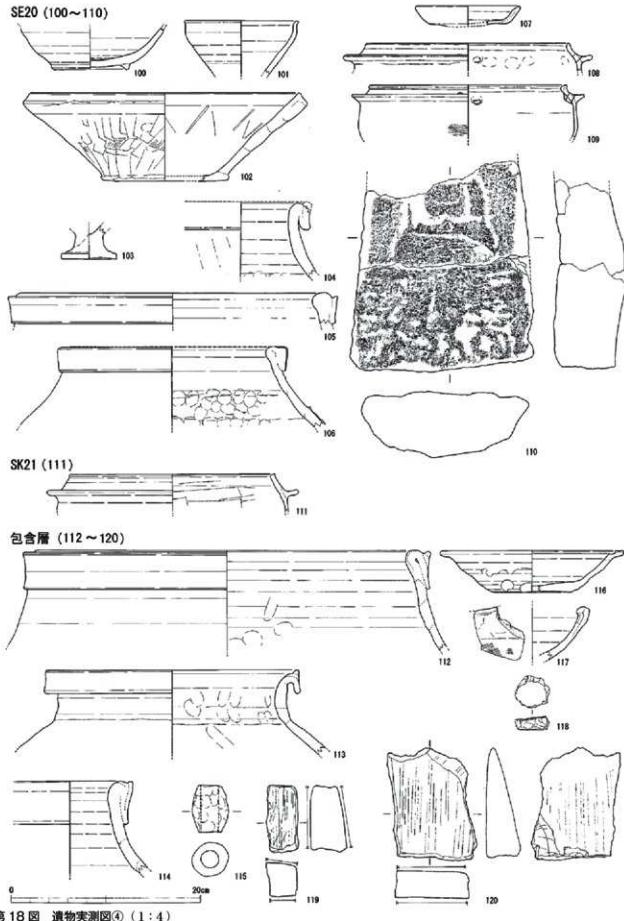
上野1号墳 (49~56)



第16図 遺物実測図② (1:4)

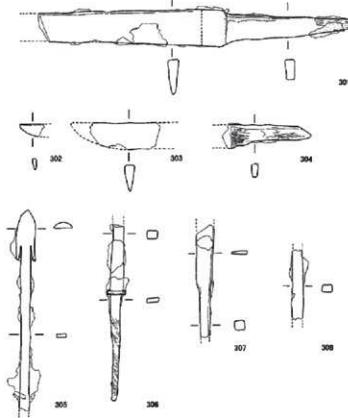


第17図 遺物実測図③ (1:4)



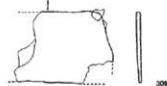
第18図 遺物実測図④ (1:4)

上野1号墳 (301~308)

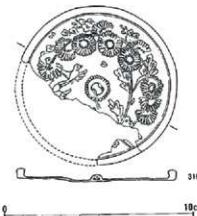


第19図 遺物実測図⑤ (1:2)

SK21 (309)



SD13 (310)



3. 金属製品の蛍光X線分析

以下の通り、茶釜持手 (66) と菊花双鳥鏡 (310) は蛍光X線分析を実施した。分析は三重県総合博物館の調査協力により、実施した。

(1) 茶釜持手 (66)

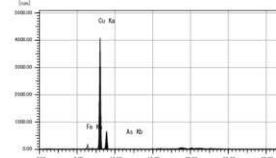
〔測定条件〕

測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件 ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/4/13 14:02
品名	上野遺跡
品番	茶釜持手
ロットNo.	
オペレータ	
備考	

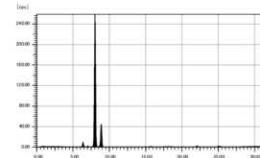
	測定条件 1	測定条件 2	測定条件 3	測定条件 4
測定時間 (秒)	45	45	45	45
有効時間 (秒)	38	44	30	30
コリメータ	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm	φ 8.0 mm
励起電圧 (kV)	50	50	15	15
管電流 (μA)	1000	1000	1000	770
フィルター	Pb用	Cd用	Cl用	OFF
マイラー	加 ⁻	加 ⁻	加 ⁻	加 ⁻
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ビーキング タイム	1.0 usec	1.0 usec	1.0 usec	1.0 usec

〔X線スペクトル〕

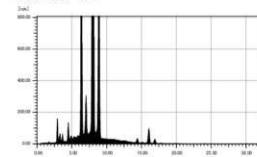
<測定条件 1>



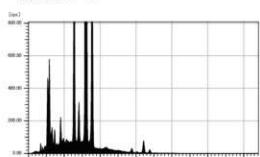
<測定条件 2>



<測定条件 3>



<測定条件 4>



〔定量結果〕

Fe	3.48 (wt%)
Cu	96.49 (wt%)
As	0.03 (wt%)

第20図 茶釜持手分析結果



※報告番号は301~
※実測番号はK1~

第2表 金属製品一覧表

報告番号	実測番号	器種	形状	出土位置	接合有無	備考
301	K3	刀子 鹿角装刀子	残存長16.4cm	SX8(上野1号墳)2区南ベルト床面	接合有	
302	K9	刀子切先片	残存長1.3cm	SX8(上野1号墳)4区トレーナ	接合無	
303	K8	刀子刀身片	残存長3.6cm	SX8(上野1号墳)1区	接合無	
304	K7	刀子茎	残存長4.6cm	SX8(上野1号墳)2区	接合無	柄に鹿角装
305	K4	鉄鎌 長頭鎌	残存長10.5cm	SX8(上野1号墳)4区南ベルト床面	接合有	樹皮残存
306	K5	鉄鎌	残存長9.2cm	SX8(上野1号墳)4区南ベルト床面	接合有	
307	K6	鉄鎌	残存長5.8cm	SX8(上野1号墳)4区南ベルト床面	接合無	
308	K10	鉄鎌頭部片	残存長3.6cm	SX8(上野1号墳)4区トレーナ	接合無	
309	K2	板状鉄製品	幅5.0cm	D1-D2 SK21	接合有	
310	K1	和鏡 菊花双鳥鏡	鏡面径8.3cm	F4 SD13	接合有、4片	

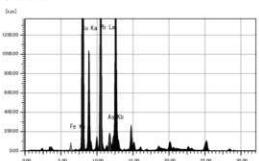
(2) 菊花双鳥鏡 (310)

[測定条件]

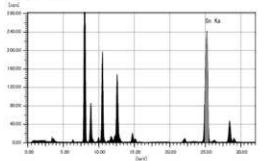
測定装置	SEA1200VX ID_1443
分析条件 ファイル名	20170323.bfp
管球ターゲット元素	Rh
測定日付	2017/4/13 13:42
品名	上野遺跡
品番	銅鏡
ロットNo.	
オペレータ	
備考	

[X線スペクトル]

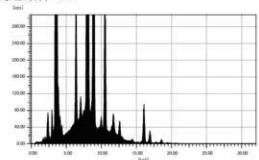
<測定条件 1>



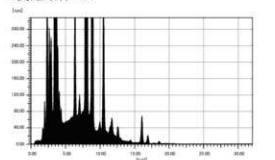
<測定条件 2>



<測定条件 3>



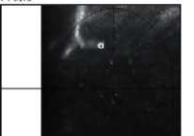
<測定条件 4>



[定量結果]

Fe	1.15 (wt%)
Cu	46.25 (wt%)
As	8.12 (wt%)
Sn	23.08 (wt%)
Pb	21.38 (wt%)

[試料像]



第 21 図 菊花双鳥鏡分析結果

第 3 表 遺物観察表①

検査用 器番号	番号	出力位置 番号	出力位置 番号	幅 (mm)	高さ (mm)	深さ (mm)	測量法の特徴			地土	地盤	色調	保存度	備考		
							内へ切りナ、ド、クロカズリ、クロカズ	内へ切りナ、ド、クロカズリ、クロカズ	内へ切りナ、ド、クロカズリ、クロカズ							
1	2-3	直角鏡 斜面	18, 20	-	9.0	-	2.0	内へ切りナ、ド、クロカズリ、クロカズ	内へ切りナ、ド、クロカズリ、クロカズ	内へ切りナ、ド、クロカズリ、クロカズ	砂	良好	灰 (36/0)	70	○初期	
2	3-7	直角鏡 斜面	14, 18	-	11.0	-	3.9	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (1mmの細かい骨粉含む) G2	良好	灰 (37/1)	口5	116~50	
3	1-1	直角鏡 斜面	20	-	12.8	-	4.4	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (1mmの細かい骨粉含む) G2	良好	灰 (36/1)	95	○初期	
4	1-2	直角鏡 斜面	20	-	10.9	-	4.3	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (1mmの細かい骨粉含む) G2	良好	灰 (37/1)	95	○初期	
5	3-4	直角鏡 斜面	14, 16, 20	-	9.4	-	4.0	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂	良好	灰 (37/1)	95	○初期	
6	1-3	直角鏡 斜面	14, 18	-	11.0	8.3	2.9	内へクロカズリ、内へクロカズリ、当り直す	内へクロカズリ、内へクロカズリ、当り直す	内へクロカズリ、内へクロカズリ、当り直す	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	90	○地上部	
7	1-1	直角鏡 斜面	14, 16, 20	-	11.1	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (37/1)	口5	○初期(内半周)	
8	3-3	直角鏡 斜面	10, 13 (18, 22, 24)	-	11.2	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
9	3-6	直角鏡 斜面	14, 16, 20	-	10.8	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	95	○初期(内半周)	
10	1-5	直角鏡 斜面	8	8.3	9.0	8.1	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (37/1)	100	○地上部	
11	1-1	直角鏡 斜面	14, 16	-	9.8	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
12	2-2	直角鏡 斜面	12, 13 (16, 18)	-	-	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ、ナメ	内へクロカズリ、内へクロカズリ、ナメ	内へクロカズリ、内へクロカズリ、ナメ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
13	4-2	直角鏡 斜面	20	-	4.9	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (37/1)	95	○初期	
14	4-4	直角鏡 斜面	14	-	14.5	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (1~2mmの骨粉含む) G1	良好	灰 (36/0)	95	○初期~中段	
15	1-2	直角鏡 斜面	14, 16	-	11.8	8.6	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
16	4-2	直角鏡 斜面	14, 16	-	10.2	7.8	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (37/1)	95	○初期~中段	
17	2-2	直角鏡 斜面	14, 16	-	8.5	10.8	20.0	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
18	5-3	直角鏡 斜面	13 (35)	-	-	10.6	-	内へクロカズリ、スカリナツ肉	内へクロカズリ、スカリナツ肉	内へクロカズリ、スカリナツ肉	砂	良好	灰 (32/7)	95	○初期	
19	2-1	直角鏡 斜面	14	-	7.5	10.0	8.2	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	100	○初期	
20	3-4	直角鏡 斜面	13 (14) (35)	-	-	-	-	内へクロカズリ、カキナ、クロカズリ	内へクロカズリ、カキナ、クロカズリ	内へクロカズリ、カキナ、クロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	95	内表面に茶色い斑状模様あり	
21	1-4	直角鏡 斜面	14	-	7.8	3.5	5.8	内へクロカズリ、内へ切り	内へクロカズリ、内へ切り	内へクロカズリ、内へ切り	砂 (1~2mmの骨粉含む) G1	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
22	3-5	直角鏡 斜面	12, 20, 25	-	9.4	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (37/1)	95	○初期	
23	2-4	直角鏡 斜面	14	-	12.7	-	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (37/1)	95	○初期	
24	1-4	直角鏡 斜面	14	-	-	13.3	-	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (1~2mmの骨粉含む) G1	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
25	1-7	直角鏡 斜面	14 (12), 16, 4E	-	12.3	12.0	14.4	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	内へクロカズリ、内へクロカズリ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
26	4-10	直角鏡 斜面	14 (16)	-	-	-	-	内へクロカズリ、ナメ	内へクロカズリ、ナメ	内へクロカズリ、ナメ	砂 (5~10mmの骨粉含む) G3	良好	灰 (37/1)	95	○初期	
27	1-3	直角鏡 斜面	14	-	-	13.4	-	内へクロカズリ	内へクロカズリ	内へクロカズリ	砂 (1~2mmの骨粉含む) G1	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
28	11-1	上端鏡 底面	14, 20, 4E	-	-	-	-	内へクロカズリ、タラキナ、タラキナ	内へクロカズリ、タラキナ、タラキナ	内へクロカズリ、タラキナ、タラキナ	砂 (1~4mmの砂粒) G1	良好	灰 (36/0)	95	○初期	
29	3-9	ガラス鏡 底面	14, 16, 20	-	0.7	0.5	0.5	-	-	-	湿潤	-	充満	0.47g		
30	10-10	ガラス鏡 底面	14, 20	-	-	-	-	-	-	-	湿潤	-	充満	0.43g		
31	3-4	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.25	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.11g
32	4-5	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.3	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.08g
33	3-4	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.25	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.06g
34	1-4	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.3	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.10g
35	3-4	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.3	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.07g
36	0-11	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.3	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.06g
37	0-12	白石鏡 底面	14, 20	-	0.45	0.1	0.3	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.13g
38	0-13	白石鏡 底面	14, 20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.10g
39	0-14	白石鏡 底面	14, 20	-	0.4	0.1	0.3	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.08g
40	0-15	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.2	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.06g
41	0-16	白石鏡 底面	14	0.4	0.1	0.2	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.04g
42	0-17	白石鏡 底面	14, 20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.04g
43	0-18	白石鏡 底面	14	0.5	0.2	0.2	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.10g
44	0-19	白石鏡 底面	14	0.5	0.2	0.2	-	-	-	-	-	-	-	灰 (37/1)	充満	0.12g

第4表 遺物観察表②

報告書 登録番号	種類	出土位置 出土地名	法線(m)		測量技術の特徴			出土	地成	色調	保存度 (%)	備考	
			日付	深度 (cm)	精度	基準	測量						
45 8-20	陶器	東山 258	20.0	6.1	-	-	気泡(9/17)	用脚	重質	0.9%			
46 8-21	陶器	東山 258	20.0	6.1	-	-	気泡(9/17)	用脚	重質	0.9%			
47 8-22	陶器	東山 258	20.0	6.1	-	-	気泡(9/17)	用脚	重質	0.9%			
48 8-23	陶器	東山 258	20.0	6.1	-	-	気泡(9/17)	用脚	重質	0.9%			
49 8-25	陶器	東山 258	20.0	6.1	-	-	気泡(9/17)	用脚	重質	0.9%			
50 8-4	陶器	東山 258	-	1.0	内-クロロナダ、村井良台、赤切面 内-クロロナダ、赤切面あり	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
51 8-7	陶器	東山 258	-	1.0	内-クロロナダ、村井良台、赤切面 内-クロロナダ、赤切面あり	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
52 8-4	陶器	東山 258	-	1.0	内-クロロナダ、村井良台、赤切面 内-クロロナダ、赤切面あり	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
53 4-11	陶器	F2	20.6	-	内-クロロナダ、赤切面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
54 8-7	陶器	東山 258	-	1.0	内-クロロナダ、村井良台、赤切面 内-クロロナダ、赤切面あり	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
55 13-1	土師器	E2, E3, E4	20.3	-	内-クロロナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
56 13-2	瓦	E2	-	1.0	内-クロロナダ、村井良台、赤切面 内-クロロナダ、赤切面あり	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
57 5-4	陶器	B4	28.2	10.4	8.4	内-クロロナダ、村井良台、赤切面 内-クロロナダ、赤切面あり	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
58 8-7	陶器	B2, C1, C2	31.6	11.6	-	内-クロロナダ、村井良台、赤切面、 内-クロロナダ、赤切面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
59 8-3	陶器	B2	11.4	-	-	内-クロロナダ、赤切面、赤切面 内-クロロナダ、赤切面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
60 7-1	天板瓦	石屋 355	10.6	-	内-油面	内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
61 7-2	陶器	平野 355	13.4	-	内-クロロナダ、赤切面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
62 7-3	陶器	平野 355	-	8.2	外-引り出しと合せ、輪トランク付、 輪脚	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
63 8-4	陶器	平野 355	16.8	-	内-クロロナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
64 12-5	土師器	G3	22.8	27.5	-	内-クロロナダ、赤切面 内-クロロナダ、赤切面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
65 13-4	土師器	G3	23.4	27.5	-	内-クロロナダ、赤切面のちヨコナダ 内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
66 10-1	土師器	G3	-	-	内-ヨコナダ、チハナ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
67 13-6	土師器	G3	8.1	-	内-クロロナダ、赤切面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
68 10-1	剪輪瓦	石屋 355	10.6	8.2	2.1	内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
69 13-7	土師器	E4	10.6	8.2	2.1	内-油面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
70 7-4	瓦	石屋 355	15.4	-	内-クロロナダ、赤切面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
71 8-5	土師器	G1, G2, G3, 口部(G3)	30.2	-	内-クロロナダ、赤切面のちナダ、 内-ヨコナダ、ハラコロナダ(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
72 7-3	陶器	石屋 355	31.6	-	内-クロロナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
73 7-7	陶器	石屋 355	18.8	-	内-クロロナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
74 14-4	土師器	G3	23.8	27.5	-	内-クロロナダ、ナメナハ、赤切面(2)方向、 輪脚付	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、赤切面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
75 14-2	土師器	G3	23.8	27.5	-	内-クロロナダ、赤切面のちヨコナダ、 輪脚付	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
76 14-1	土師器	G3	18.8	19.5	-	内-クロロナダ、赤切面のちヨコナダ、 輪脚付	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
77 14-3	土師器	G3	13.4	-	内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
78 B-1	陶器	石屋 355	27.2	-	内-クロロナダ、赤切面、ヨリヨロケナ 内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
79 3-4	陶器	D4, D5, D6, 口部(D6)	21.4	-	内-クロロナダ、赤切面のちヨコナダ 内-ヨコナダ、ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
80 8-2	陶器	E3	15.6	-	内-クロロナダ、赤切面のちヨコナダ、 輪脚付	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
81 7-5	陶器	E3	-	-	内-クロロナダ、赤切面のちヨコナダ、 輪脚付	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%			
82 14-4	土師器	D3	2.8	4.3	1.3	内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-油面	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		
83 B-3	陶器	石屋 355	10.0	8.8	-	内-ヨコナダ、赤切面のちヨコナダ 内-ヨコナダ、ヘラエ工良(2)方向、 輪脚付	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	良(2.5/9)	底面	重質	0.9%		

第5表 遺物観察表③

報告書 登録番号	種類	出土位置 出土地名	法線(m)		測量技術の特徴			出土	地成	色調	保存度 (%)	備考
			日付	深度 (cm)	精度	基準	測量					
84 8-1	陶器	F4	-	-	-	内-クロロナダ	底面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、底面	重質	0.9%	小	底面(0.9/5)/D 底面(0.9/5)/E 底面(0.9/5)/F 底面(0.9/5)/G
85 14-7	土師器	F4 土師	最大 1.2	1.2	8.7	内-クロロナダ、底面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、底面	重質	14.2%			
86 9-2	陶器	F2	-	-	2.5	内-クロロナダ、底面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、底面	重質	0.9%			
87 9-3	陶器	F3	8.2	4.6	2.6	内-クロロナダ、底面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、底面	重質	0.9%			
88 9-5	陶器	F3	28.0	-	-	内-クロロナダ、ヨロヅアリ、底面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、ヨロヅアリ、底面	重質	0.9%			
89 9-7	陶器	F3	25.4	-	-	内-クロロナダ、底面(サウス)のヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、底面(サウス)のヨロヅアリ	重質	0.9%			
90 9-9	陶器	F2	23.8	-	-	内-クロロナダ、底面(サウス)のヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、底面(サウス)のヨロヅアリ	重質	0.9%	小	底面(0.9/4)/F 底面(0.9/4)/G	
91 14-9	土師器	F3	8.8	-	-	内-ヨコナダ、ナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ	重質	0.9%			
92 14-8	土師器	F2	12.0	5.7	5.7	内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	重質	0.9%			
93 9-5	陶器	E2	28.4	-	-	内-ヨコナダ、ヨロヅアリのちヨロケナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	重質	0.9%			
94 8-2	陶器	F2	-	-	6.7	内-クロロナダ、底面(サウス)のヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-クロロナダ、底面(サウス)のヨロヅアリ	重質	0.9%	小	底面(0.9/5)/F 底面(0.9/5)/G	
95 15-1	土師器	上屋	10.7	6.4	2.3	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	重質	0.9%	小		
96 15-2	土師器	上屋	12.8	6.8	3.0	内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	重質	0.9%			
97 15-3	土師器	下屋	26.7	-	-	内-ヨコナダ、ヨロヅアリ、底面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ヨロヅアリ、底面	重質	0.9%			
98 10-3	陶器	下屋	21.0	-	-	内-ヨロヅアリ、底面	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ、底面	重質	0.9%			
99 10-2	陶器	下屋	11.9	8.2	8.1	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	重質	0.9%			
100 10-4	陶器	下屋	21.4	8.2	8.1	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
101 10-5	陶器	下屋	32.0	-	-	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
102 10-6	陶器	下屋	21.0	-	-	内-ヨロヅアリ(底面)、ナダ(底面)	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ(底面)、ナダ(底面)	重質	0.9%			
103 14-7	土師器	下屋	11.8	8.2	8.1	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	重質	0.9%			
104 10-4	陶器	G4	-	-	-	内-ヨロヅアリ、底面(サウス)のヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ、底面(サウス)のヨロヅアリ	重質	0.9%	小	底面(0.9/5)/G	
105 10-5	陶器	G5	-	-	-	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%	小	底面(0.9/5)/H	
106 10-7	陶器	下屋	21.0	-	-	内-ヨロヅアリ(底面)、ナダ(底面)	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ(底面)、ナダ(底面)	重質	0.9%			
107 14-3	土師器	下屋	11.8	8.1	8.0	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	重質	0.9%			
108 10-6	陶器	下屋	21.4	8.2	8.1	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	重質	0.9%			
109 10-5	陶器	下屋	20.5	8.2	8.1	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	重質	0.9%			
110 11-5	石瓢	下屋	21.3	8.0	7.3	内-ヨコナダ	-	-	-	-		
111 15-7	土師器	下屋	-	-	-	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)	重質	0.9%			
112 9-4	陶器	H4	30.2	-	-	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
113 9-5	陶器	H3	26.4	-	-	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
114 9-2	陶器	F3	-	-	-	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
115 14-4	陶器	底土	2.8	1.9	1.9	内-ヨコナダ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ	重質	0.9%			
116 9-3	陶器	F2	18.2	8.4	4.4	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
117 6-1	陶器	F3	-	-	-	内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨコナダ、ナダ(サウス)、ヨロヅアリ	重質	0.9%			
118 5-1	陶器	底土	5.5	3.5	3.3	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
119 6-2	陶器	底土	9.9	3.0	2.7	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
120 13-3	陶器	底土	11.6	8.5	3.5	内-ヨロヅアリ	-	-	-	底土(0.9/3)		
121 14-4	土師器	底土	2.8	4.3	1.3	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
122 14-5	土師器	底土	2.8	4.3	1.3	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
123 14-6	土師器	底土	2.8	4.3	1.3	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
124 14-7	土師器	底土	2.8	4.3	1.3	内-ヨロヅアリ	中やわらか(1)~(2)の砂質少量 内-ヨロヅアリ	重質	0.9%			
125 14-8	土師器	底土	2.8	4.3								

V 調査のまとめと検討

1 上野1号墳の位置づけ

上野1号墳は、これまで後期古墳が確認されていなかった阿倉川地城で新たに確認された古墳である。当地的古墳としては比較的大ぶりの石材を使用した横穴式石室を有することが特徴で、構築時期は出土した須恵器から6世紀後半頃と考えられる。

近傍で本古墳と類似した石室を持つ古墳としては、北北東約3.5kmに所在した久留倍遺跡SX141がある^①。この古墳は、久留倍遺跡第3次調査で確認されたもので、盃掘により大きく破壊されていたが、最大幅1.7m、長さ3.5mの疑い切妻式かと思われる石室の基底部が検出された。床面は襖敷となており、石室石材は円錐形～角錐形を呈し、鍛錫 30～150cm程度の砂岩・礫岩・礫質砂岩である。出土遺物は、6世紀後半から7世紀中葉の須恵器のほか、鐵鏺・刀子などの鉄製品、滑石製白玉などの玉類があり、上野1号墳と似通った構成であることがわかる。

石室石材の産地は、上野1号墳では員弁川上流域に産する砂岩であると鑑定されている。久留倍遺跡SX141では、美濃帯中・古生界に由来する礫であると判断され、詳細な産地は員弁川水系由来の可能性もあると指摘されている。久留倍遺跡SX141の石材が現存しないので確定はできないものの、石材は両方とも員弁川水系から搬入された砂岩を使用している可能性が高い。

両者の立地について見ると、上野1号墳は上野遺跡がある丘陵の南方に突出した突端部にあり（第2図・第3図参照）、かつて周囲が低地であったことを考えれば、遺跡内ではさほど高い場所ではないものの、目立った存在であったと推定される。久留倍遺跡SX141は、同遺跡内の最高所に位置し、極めて眺望が良好な立地である。

以上のように、上野1号墳と久留倍遺跡SX141は共通点が多く見いだされる。近隣の同時期の横穴式石室古墳としては、平津町の八幡古墳^②や、小牧町の筆ヶ崎古墳群があるが、これらはやや内陸にあり、石室には比較的小ぶりの石材を使用し、石材も近傍で入手できる花崗岩などを用いている。上野1号墳、

久留倍遺跡 SX141 は共に海蔵川、朝明川の河口付近の目立つ場所に立地し、員弁川水系から石材を搬入していると考えられる点から、同時期の水運に関わった支配者層を被葬者として想定しておきたい。

2 中世の造構について

今回の調査では第1次・第2次調査で検出されたような建物跡は確認されず、土坑と溝のみが検出された。出土遺物は、中世後期の土器・陶器類が中心で、異なる遺構間で出土した破片が接合したものもある。調査地が遺跡の縁辺部であることから、集落の不用品廃棄場所であり、頻繁に土坑の掘り直しがあったと想られる。さらに、藏骨器の可能性がある古漁戸四耳壺や常滑焼灰口壺が出土している点から、調査地周辺に中世墓も存在したと考えられる。

3 SE20出土の石仏について

SE20 の最下層からは、石仏（110）が出土している。この石仏と同型の資料は、市内平津町の八幡神社境内の祠に安置された石仏に類例がある。ここにはもう1体、上部を三角形に尖らせ、前面を長方形に彫り込んで像を陽刻するタイプの石仏が並んで安置されている。これと同種の石仏が桑名市の志知南浦遺跡で検出された中世後期の井戸 SE58 で出土しており、この井戸の埋没土層年代から石仏の所属時期の一端は 16世紀末に置くことができるとしている^③。上野遺跡 SE20 は、出土遺物から 16世紀後半台を埋没年代の上限と考えることができるために、石仏もその頃の所産と見られ、志知南浦遺跡例と合わせ、16世紀後半から末頃の当地における石仏の様相を知ることができる資料と言えよう。（山本）

【註】

- ① 四日市市教育委員会『久留倍遺跡5』2013
- ② 四日市市教育委員会『四日市の後期古墳』1973
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT建設に伴う）埋蔵文化財発掘調査概報IV』2014
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008



調査区全景（東から）



調査区北部全景（北西から）

図版2



上野1号墳全景（北東から）



上野1号墳全景（南西から）

図版3

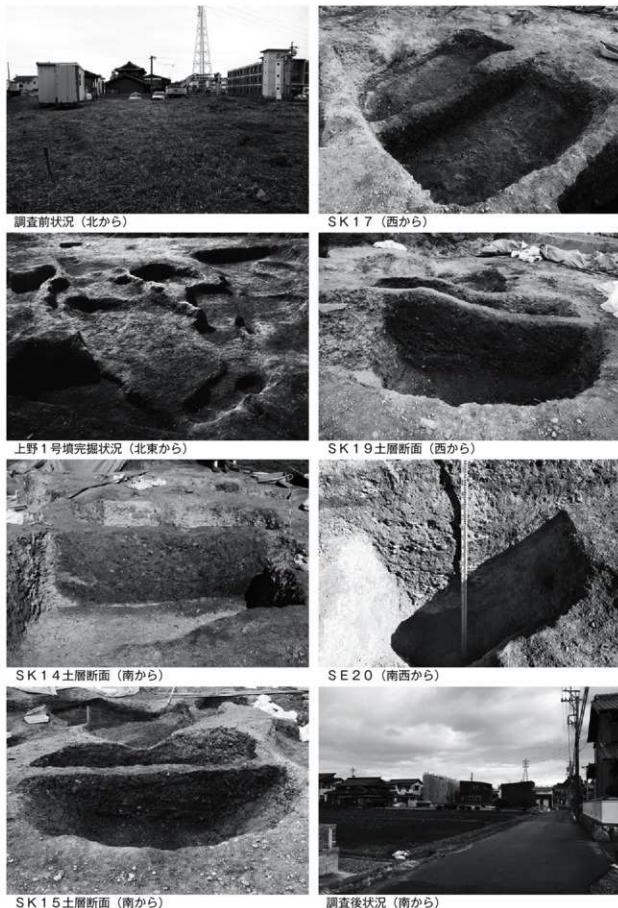


上野1号墳玄室遺物出土状況（北から）



上野1号墳玄室遺物出土状況（南東から）

図版4



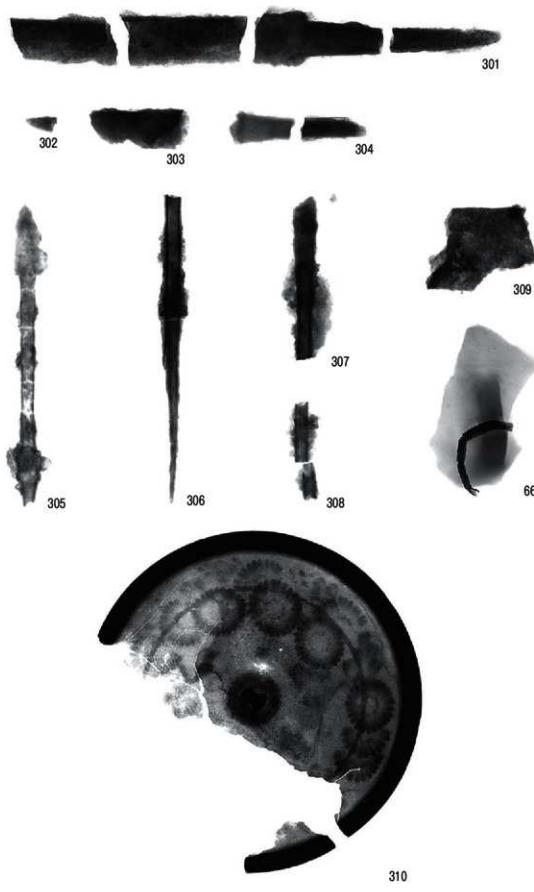
図版5



図版6



図版7



金属製品X線写真

報告書抄録

ふりがな	うえのいせき さん・うえのいちごうふん						
書名	上野遺跡3・上野1号墳						
シリーズ名	四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	54						
編著者名	山本達也 川崎志乃 伊藤裕之						
編集機関	四日市市教育委員会						
所在地	〒510-8601 三重県四日市市諏訪町1番5号 Tel059-354-8240						
発行年月日	2018(平成30)年3月31日						
所収遺跡名	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
所収遺跡名	ありがな 所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		
上野遺跡	四日市市西阿賀	24202	479			466	
上野古墳群1号墳	四日市市西阿賀	24202	585	34° 59' 06"	136° 37' 13"	36.97	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上野遺跡	集落跡	弥生・鎌倉・室町	土坑・溝・竪坑	土師器・陶器・和鏡・石仏	蔵骨器の可能性がある陶器壺のほか和鏡が出土しており、中世の墓域が想定される。		
上野古墳群1号墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器・土師器・鉢・皿等	新規確認した古墳時代後期の横穴式石室を主体部にもつ古墳。		
要約	<p>上野遺跡は、海蔵川左岸の阿倉川台地南端に立地する遺跡である。調査の結果、中世後期の土坑・井戸・溝が検出されたが、建物跡は確認できなかった。遺物は、陶器壺・甕・鉢類や土師器鏡・皿等のほか和鏡、石仏がある。第1次・第2次調査で確認されていた中世集落の縁辺部と考えられ、蔵骨器の可能性がある陶器壺などの存在から、墓域も想定される。</p> <p>上野古墳群1号墳は、今回の調査区内において新規に確認した古墳である。ほぼ南北に主軸を置く横穴式石室を主体部にもち、石室は負井川水系の砂岩を用いている。副葬品は須恵器、鹿角装刀子、鉢、玉類がある。6世紀後半の築造とみられ、7世紀前半まで追葬が行われたと考えられる。立地などから当地の水運に関わる支配者層が被葬者として想定される。</p>						

